

# アート活動による マイクロコミュニティの思索

前田博子

(2022年3月2日受理)

## Speculate about micro-communities through Art project

Hiroko MAEDA

### はじめに

本研究は大量生産されるものづくりのあり方や資本主義社会に対して問題提起することを出発点としており、スペキュラティブ・デザイン<sup>1)</sup>やソーシャリー・エンゲイジド・アート<sup>2)</sup>の枠組みから暮らしのあり方を思索したものである。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、自由に他者と関われなくなったからこそ、マイクロコミュニティ形成を主眼としている。ここでのマイクロコミュニティを次のように定義する。

①2人以上の30人以下の集団

②集団の中に「勤め先や学校」「居住地」「興味関心」と行った属性を共有する他者が一人以上いる

本研究では、仁愛女子短期大学を起点とし、仁愛女子短期大学教職員、森田地区、アートへの興味関心を含んだ人々との関わりをアート活動を通して考察している。

### 1. 背景と目的

2019年森田地区の見知らぬ女性が住んでいた家を解体するため、家の中にあったものを持ち帰ったことから始まっている。彼女から預かった布、糸、衣は他者との共有物、共有財産としてきた。《見知らぬ女性からのおすそわけ》<sup>3)</sup>《おすそわけマスク》<sup>4)</sup>は共有するアイテムとして人々に動員された。それらは心理的、身体的に身を守り、社会（マイクロコミュニティ）へ解放されている。着用者・使用者

である他者と再生産者であるわたしの間には見知らぬ女性の遺品そのものとそれらを集めた彼女の意図や想いを共有できると規定した<sup>5)</sup>。顔も知らない、もう会うこともない女性が過ごした時間を衣服や布、糸を介しながら、それらを見知らぬ女性とわたし、そして見知らぬ誰かとの関わりをアート活動と位置付けている。共有財産を材料（のちに共有資材と呼ぶ）として再生産したものを他者へ「おすそわけ」することを主軸としており、金銭を介さないことをルール付けている。

## 2. 《GO!GO!YAMADA!!》<sup>6)</sup>

### 2-1. 制作背景

2020東京オリンピックが2021年に開幕した。その開幕までの間、聖火が日本各地を巡っている。この聖火リレーは各県、市町村により形式が異なった。新型コロナウイルス感染拡大を予防するため聖火を持って公道を走ることはせずトーチキス<sup>7)</sup>のみで灯を渡す方法が主流であったが、福井県勝山～大野間は従来通り公道での聖火リレーを実施した。奇遇にも本学職員の山田さんが聖火ランナーに選ばれた。2020年に開催されるはずだったオリンピックが延期になった頃から山田さんは「寂しい」「どうなるんですかね」と落ち込んでいた。オリンピックや聖火リレーの行方と、行方の無い布とが重なったことから、山田さんを応援する横断幕を制作することにした。

## 2-2. 制作方法

- ① 紅白の横断幕を紅と白に切り分ける。(図1、図2)
- ② 紅のみを縫い合わせ、1000mm×5000mmの布をつくる。
- ③ ②の布を下地に「GO!GO!YAMADA!!」文字を①の白い布で配置し、縫い付ける。
- ④ 本学関係者に応援メッセージを書いてもらう。(図3)
- ⑤ 最後に制作者のサインをオリジナル判子とタグをつけて完成。(図4)

## 2-3. 灯をつないでくれた人

「Hope Lights Our Way 希望の道を、つなごう」これは聖火ランナー山田氏が掲げたコンセプトである。まず、わたしたちが出来ることは布を繋ぐことである。

「余白の部分にメッセージ書いてあるといいかも」と制作を手伝ってくれていた岩田さんの提案からメッセージを募集した。「※山田さんには内緒です」を合言葉に布が置いてある場所を伝え、本学に勤務する教職員の空き時間に朱赤、茶、こげ茶のペンでメッセージを書いてもらった。縫う事と書く事が同時だったため、文字も縫い目も同じ時間を共有しながら制作してある。

裁縫を得意とするわたしと岩田さんはメッセージを書かなかった。古来より女性は縫うことによって他者を想ってきたからである。母から子へ、妻から夫へと針を進める時、その人たちは一針一針想いを込めてきた。大概のことは家族の健康であったが、それに似た感覚で縫い進めている。具体的な言葉より行為の方が勝ることをわたしたちが信じているためある。これらの行為の根源は「千人針」を意匠(模倣)している。「千人針」は戦争から無事に帰って



図1：紅白の横断幕



図2：紅と白を切り分けているところ



図3：メッセージを書いているところ



図4：完成した横断幕

来るようにと女性の針仕事をお守りとして持たせたものだが、オリンピックそのものが戦いのない世の中にするを目的に始まったことから縫う行為が人を守り、救うことをわたしたちの縫う行為を通して表現している。

2021年5月30日（日）聖火リレー当日は集合場所や集合時間を決めず、各自の意思によって彼が走行する場所に自然とチームダーヤマが集まっていた。当の聖火ランナーの山田氏はわたしたちが居ることさえ知らなかったので、わたしたちと山田さんとの出会いは互いに感動を与え合っていた。

翌日、聖火リレーを直接見られなかった人たちのために、トーチのお披露目会が行われた。その時の記録として集合写真を撮った（図5）。のちに、講演依頼が殺到した聖火ランナー山田氏はこの横断幕を持参し、講演会場の演台付近に展示してくれた。山田さんにとってトーチは「みんなが笑顔になる魔法の道具」となり、横断幕は「僕の宝物」となった。

灯を直接繋いだのは山田氏とその他の聖火ランナーであるが、《GO!GO!YAMADA!!》の存在がその場に居た人とメッセージを書いてくれた人、そして見知らぬ人とこれからの未来を生きる人々とをつなぐものとなった。



図5：聖火ランナー山田氏と教職員との記念写真

## 2. 仁愛保育園とのアートプロジェクトと《わたしたちの秘密のお庭》

### 2-1. じんあいほいくえんart galleryの提案

2021年7月から新しい仁愛保育園が建設される場所に仮囲いが設営され、白い大きな壁が現れた。壁

の向こう側では新しい保育園が建設されてゆく。その過程を園児とその親、そして建設作業を行なっている人とで共有できるものをつくる。外出や移動が制限されている中、子どもたちが感染拡大を気にする事なく過ごせるようなアートプロジェクトを実施する。

制作におけるルールは以下の2つとした。

- ①金銭を介さない。
- ②仁愛保育園関係者(3～5歳児対象)のみの参加。

### 2-2. じんあいほいくえんart galleryの実施<sup>8)</sup>

仁愛保育園の子どもたちが新しい保育園を想像して描いてくれた絵の中から、下絵に使いそうなものをスキニングし、データを作成した。あずさんのライオンとひらがな、まゆさんのキリン（図6）とチューリップ、なつさんのクワガタ（図7）こうたろうさんのムカデと虫、さくらさんの花とひらがな、はるひさんの花、しおりさんの蝶々、わかかなさんの蝶々、ともなりさんの木と蕾、まひろさんのひらがなを使用した。もしかすると子どもたちが想定していたモチーフとわたしの解釈が異なるかもしれないが、直接的なコミュニケーションを避けたから生まれたズレをも表現の一部とした。出来上がった下絵データは黒いカッティングシートに加工してもらい、仕上がったシートを白い壁に貼った。これを本プロジェクトの下絵とし、子どもたちに色鮮やかな丸いシールやマスキングテープを貼ってもらうこととした。



図6：子どもの描いた絵



図7：子どもの描いた絵

3歳、4歳、5歳児の保護者の方向けに、招待状（図8）を作成し、各家庭に配布してもらった。招待状の中に本プロジェクトの参加方法と注意事項を

明記した。直径39mmに切った円のシールを三歳児には3枚、四歳児には4枚、五歳児には5枚同封した。



図8：招待状

実施日は2021年12月11日(土)、12日(日)、18日(土)、19日(日)、25日(土)、26日(日)、2022年1月8日(土)、9日(日)、10日(月)、15日(土)、16日(日)。

工事車両が行き交う平日は避け、土曜と日曜、祝

日をワークショップ実施日とした。

仁愛女子短期大学の正面玄関にシールやテープを置き(図9)、自由に貼ってもらった。(図10、11)

ワークショップ参加の返礼品として《見知らぬ女性のおすそわけ》からエコバックを再生産し、自由に持ち帰ってもらった。(図12)

園児たちは「おともだち」が描いた下絵を頼りに自身の痕跡を残すことを毎週繰り返していた。先週の痕跡を頼りに別の誰かがそのイラストを解釈し、新たな線や色が足されていく。園児とその家族の主體的な参加によってこの間接的な対話から紡がれた物語は、本プロジェクトに参加した人々の軌跡を残した。交換日記のような画面が毎週描かれ、新たな物語が紡がれていた。白い大きな壁だった仮囲いが子どもたちの行為により華やいだ空間を演出していた。わたしたちが出逢い、過ごした時間を伝える軌跡の壁へと変容した。



図9：WS開催時の玄関風景



図10：園児がシールを貼る様子



図11：園児がシールを貼った様子



図12：おすそわけバック (WS返礼品)



図13：シール剥がすよの会



図14：シール剥がすよの会

本プロジェクトを実施するにあたり、工事施工会社からの条件は「現状復帰」であった。そのため2022年1月21日（金）に仁愛保育園の園児たちと貼ったシールやテープを剥がす「シール剥がすよの会」を実施した。（図13、14）子どもたちの会話には「わたしがやったやつ」「ママのだ」等そこに描かれた絵についてのエピソードを話してくれる園児が多かった。これらは秘密であったことと、その秘密を共有する仲間が同じ保育園の「おともだち」であることがストーリーに深みをもたせている。

### 3. おすそわけによる互酬性

《GO!GO!YAMADA!!》《私たちの秘密のお庭》を制作している際、本学教職員や仁愛保育園の教職員の協力を得たことは言うまでもない。特に《私たちの秘密のお庭》「シール剥がすよの会」には予告や依頼をしていないにも関わらず、多くの人がシールやテープを剥がしてくれた。（図15）これは期待を

越えた互酬性であった。誰かの行為が誰かの利益となり、また別の誰かの行為によって別の利益を得ることを体感した。小さな学校のほど良い距離感が互いを支え合っている。

じんあいほいくえんart galleryでは週末のワークショップが終わると出しておいたシールやテープを毎回片付けるのであるが「ご自由に」としている以上、台の上は散乱していると想定していた。シールやテープは無くなっていても散乱した日は一度もなかった。これは親しい人しか使わないことを知っていたからではないだろうか。次の使用者が自身の知人であるからこそ、次使う人を想った行動が別の誰かへの互酬性へとつながっている。

これらの行為のさらなる互酬性として、参加証をつくった。子どもたちと一緒に創った壁から図案を作成し、その図案を、共有資材である布にスクリーンプリントした。これを50cm×50cmのハンカチとし、この贈り物を《わたしたちの秘密のお庭》とした。（図16）



図15：「シール剥がすよの会」風景

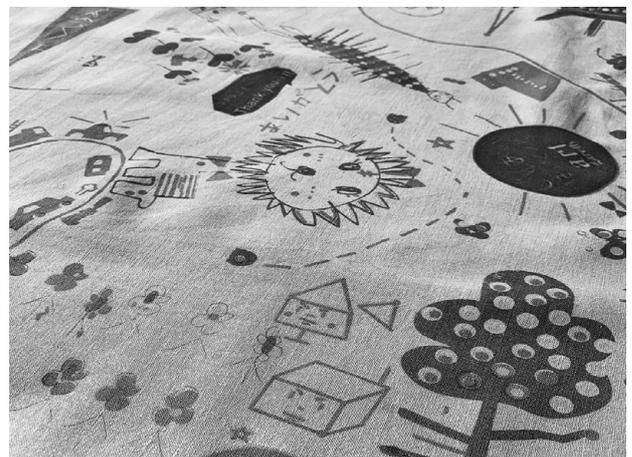


図16：園児たちへの贈り物《わたしたちの秘密のお庭》

2022年3月26日(土) 仁愛保育園卒園式に卒園生に贈るつもりだ。無くなった壁の向こう側では新しい保育園が完成する。出来上がった綺麗な保育園からは工事現場であったことさえも記憶からなくなってしまいそうだが、本プロジェクトの参加証はコロナ禍での特別な経験として記録され、記憶をたどるアイテムとして参加者に寄り添うはずである。

#### 4. 暮らし中で共有のあり方を思索する

見知らぬ女性から受け継いだ糸や布はわたしによって再生産され、他者の手元に渡っている。《GO!GO!YAMADA!!》《わたしたちの秘密のお庭》は物を介して布の持つ物語の続きを紡いでいる。そこには新たな人が加わり、つながりが増えていた。

昨年まではこの共有資材は人々を守るものであったが、記憶を辿る手がかりへと用途が変容している。共通していることはそれら一つ一つが役割を持ち、使用者の暮らしに寄り添っていることである。共有資材をマイクロコミュニティへ解放することによって、ごく自然に人とつながることができる。見知らぬ女性からの「おすそわけ」はわたしたちが思索するきっかけを与え、今必要なことを教えてくれる。

#### 註

- 1) デザインの既成概念を変えていくというコンセプトチュアル・デザインに、市場や広告、大量生産に根ざした商業的文化に対する批評的な姿勢を加えることで、具体的な(社会的な、政治的な、あるいは倫理的な)方向性を与えるもの。アンソニー・ダン&フィオナ・レイビー著 監修/久保田晃弘 翻訳/千葉敏生 寄稿/牛込陽介『スペキュラティブ・デザイン 問題解決から問題提起へ。-未来を思索するためにデザインができること』ビー・エヌ・エヌ新社/2015
- 2) SEA研究会は「現実社会に積極的に関わり、人々とのインタラクションや協働のプロセスを通じて、何らかの社会変革をもたらそうとするアーティスト活動の総称」と定義している。アート&ソサエティ研究センター SEA協会編『ソーシャリー・エンゲイジド・アートの系譜・理論・実践 芸術の社会的転回をめぐって』フィルムアート社/2018
- 3) 見知らぬ女性が所有していた衣服や布、糸を共有財産とし、他者へ「おすそわけ」するプロジェクト
- 4) 《見知らぬ女性からのおすそわけ》を使用してマスクをつくり、他者へ「おすそわけ」するプロジェクト
- 5) 前田博子「《おすそわけマスク》-コロナ禍の暮らしの中から共有のあり方を思索する-」 仁愛女子短期大学研究紀要 第53号/2021
- 6) <https://www.jin-ai.ac.jp/topics/2021/06/post-8.php> (2022年2月28日閲覧)
- 7) 聖火ランナーが次の聖火ランナーに聖火を渡す行為
- 8) <https://www.jin-ai.ac.jp/topics/2022/01/-art-parely-0--c.php> (2022年2月28日閲覧)